

自分に見えないもの

はじめに

「自分に見えないもの」ということによって何が言われているのであろうか。あるいは、この言葉を我々はどう理解することができるのであろうか。難しく考えるのでなければ、それは自分の背中であつてもよいし、自分の顔それ自体であつてもよいだろう。しかし、自分の背中であれ顔であれ、鏡によって見ることが可能なのではないか。確かに見ることは可能であるが、その見ることができるということによつて、「自分に見えないもの」としての背中というものが否定されるわけではないのである。我々は背中を見るために合せ鏡を用いたり、あるいはカメラを利用することもできよう。だがその場合、我々は我々の背中をいわ

池 上 哲 司

ば他者の視点から見ているのではなからうか。正確に言えば、他者の立場に立つ者としての自分に見える自らの背中を見ているのである。しかし、そうして自分の背中を見ようとしている、その自分の背中の中の動き、姿勢は依然として見ることができない。また他方、他者の視点からといって、それは自分の視点を器具によつて他者の位置に置き換えたにすぎず、自分とは違う者としての他者の視点を我々が獲得しているわけではない。自分の背中を見るといふ、普通きわめて簡単なことと思われている事柄にも、様々な問題が含まれているのである。そこでまず以下では、我々を「自分に見えない」という仕方で規定しているものを考えてみることにしよう。

一 自分に見えないということ

(1) パースペクティヴ性

我々はいわば世界に出会っている。そして通常その世界は万人に共通で一樣なものと受け取られている。しかし、果してそうであろうか。各自の世界は各自の世界毎に異なったものとして各自に現れているはずである。たとえば、机の上の花瓶も、それを見る者の位置によって違った形のものとして現れてくる。もっとも、これに対しては次の様な反論がなされるかもしれない。つまり、違った形と言えらるためには、その背後に何らかの基体があるはずであって、その基体はそれを見る者の位置とは全く無関係に一つであり続けるのではないかというものである。ここでは、その様な基体があるかないかには立ち入らないし、たとえあつたところで、依然として我々の見る位置によってその現れが変化するということは否定できないのである。

ところで、我々は各自異なった位置を占めており、異なった視点から世界を見ている。したがって我々に対する世界の現れ方、つまり我々の世界の見方はそれ自体絶対的なものではなく、制限をもったものであると言えよう。換言すれば、我々はある位置を占めて存在していること自体に

よって、否応なく、世界の見方を規定されてしまっているのである。そして、これは我々の側の考えでどうこうできるものではないがゆえに、我々にとつて、この知覚のパースペクティヴ性は「自分に見えないもの」として働いているのである。

(2) 自己中心性

パースペクティヴによって知覚を規定されている上に、更に我々は自己中心性ともいべきものによって制限を受けている。知覚のパースペクティヴ性にたとえ気づいたところで、我々に見えている世界が一つの相対的な世界にすぎないことを我々はなかなか納得できない。私が実際こうして見ている世界がどうして疑問を許すものであるうかと、我々は考えてしまいがちである。これは人間にとつて避けることのできない事柄である。というのは、我々が我々の行動起点となすのは、我々の身体以外にないからである。この私の身体を零点とすることによって、私の出会う世界は定位づけられる。したがって、私にとつての世界は私を中心として形成されることになる。

ここで面倒なのは、自己の身体を定位点とすることが極めて自然なことなので、各自の世界が自己中心性という歪みをもったものであることがなかなか承認できないという

点である。更にたとえそれを我々が承認したとしても、自己中心性ということを対象にし問題としながらも、我々は同時に自己中心性に歪められたものの見方をしてしまっている。すなわち、自己中心性というものが、いわば我々の世界に向き合う姿勢にとって抜き難いものなのである。ここで自己中心性という言葉は、もはや否定的な意味合いだけをもつものではなく、人間の動かし難い事実を示す言葉として受け取られるべきものであろう。

(3) 関心

世界が一つのパースペクティブの内で現れ、その世界の中心に自己が位置するとき、我々は世界をどういう仕方でも認識し統合していくのであろう。「ルービンの酒杯と横顔」の図で知られるように、対象は認識者の見方に従って変わったものとして現れる。このとき対象の側には何の変化もないわけだから、あるものがあるものとして世界の内から切り出してくるのは、あくまで認識する主体の側に求められねばならない。

ここで主体が世界を切り出してくる、その切りだし方を律しているものを我々は関心と呼ぶことができる。具体的に言うなら、ここに一枚のレントゲン写真があるとして、医学に関して興味も知識もない私にとってその写真はただ

のレントゲン写真にすぎない。しかし、医学に関心をもっている人、あるいは医学に携わっている人にとっては、そのレントゲン写真は重大な情報を伝えるものであるかもしれない。つまり、同一のレントゲン写真も、私と医者の場合ではそのもつ意味合いが全く異なるということである。

したがって私の世界の統合の仕方と医者の世界の統合の仕方は、レントゲン写真に関しては全く別物であり、その差異が生じてくるのは、世界に向かう際の関心といったものの違いがそこにあるからである。極端な例を挙げるなら、我々人間の世界統合の仕方と猫（仮に猫にも世界というものが認められるとして）の世界統合の仕方は全く違っているとされる。猫の場合には、世界は魚屋を中心点として統合されているはずである。このことは人間にも言えるわけで、教員という人々はその本性からして、一般的に言って本屋を軸として世界が統合されているだろう。もっともこれはあくまでも一般的に言っていることであって、酒屋を軸として世界統合がなされている場合もある。

(4) 文化

我々の関心に従って我々が世界をどういうものとして見るかが規定されているとして、更に新たな問題が出てくる。それは前述のレントゲン写真の例の場合、生まれてこのか

た一度もレントゲン写真を見たことのない人がその場にしたとしたら、彼にそのレントゲン写真はどのように認識されていたのかということである。つまり、ここで文化ということが問題になってきているのである。

現在我々が生きている文化の中では、レントゲン写真というものはなんの説明も必要としない普通のもの、いわば自明のものとされている。しかし、この共通の文化の外からやって来た人間にとってレントゲン写真といったものは決して自明のものではない。それはレントゲン写真に限らずテレビ、冷蔵庫等々あらゆるものに互り、我々にとって自明なものが、その人にとっては自明ならざるものとして現れているのである。したがって、その人の世界統合の仕方と我々の世界統合の仕方は一致していないと思われる。なぜならば、我々は自明なものをいわば背景あるいは地として、自明でないものを前景あるいは図として世界を統合していくからである。つまり、この例で分かるように、我々の世界統合の仕方というものは、普通このことは気づかれていないとしても、常に我々がその内で生きている文化に規定されているのである。

二 コンテクスト

(1) 経験の地平

これまで述べてきた四つのものによって、我々の世界はそしてまた我々自身は、それと意識せずに規定されている。このように「自分に見えない」という形で我々の認識と実践を規定しているものを、広い意味での我々のベースペクティヴと呼ぶこともできる。しかし、最初に述べた意味でのベースペクティヴとの混同を避けるために、それを我々の経験の地平(Horizon)と呼ぶことにしよう。ここで経験とは、世界と出会い、世界を統合していく(あるいは再統合していく)過程であるが一応形式的に考えておくことにする。さてこのような地平をもつものとして経験を考えるならば、「自分に見えない」という事情は見えない自分側のみに関るものではなく、人間が世界と出会うという経験そして経験の中で獲得される知にまでも関ってくることになる。経験が地平をもつとは、すでに述べた様に、それ自体制限されたものであるということの意味する。つまり絶対的な完全な経験は成立しえないのである。したがって、経験の内では獲得される知というものがそれ自体も、決して絶対的なものではないということになる。

しかしこれまで哲学の世界では、経験にかかわりなく得られる絶対確実な知なるものが主張されてきたのではないかと、と反論されるかもしれない。それに対しても矢張り私は、知というものは相対的なものであり、一つのコンテクストの中で、地平の中ではじめて意味をもち有効に働くと考えたい。というのは、コンテクスト・地平を抜きに、事物が我々に現れることはないし、また我々が知を必要とするのはある一定の具体的な状況においてだからである。したがって、知は流動的で相対的なあり方をしていると一言わざるをえない。これを反省との関連で言うならば、これまで疑いえない確実なものを与えるとされてきた「反省」に対して、果してそのような権利をもつものかどうかが問題とならざるをえないのである。というのは、かりに百歩誤って「反省」から得られる知の確実性を認めるとしても、知あるいは反省が我々の生における実践を完全に捉えきえることは決してできないと思われるからである。しかし、知の相対性および反省については別の機会に譲るとして、以下ではコンテクストが重要な契機となる「自分に見えないもの」としての行為の意味について考えることにしたい。

(2) 行為の意味

我々は自分の行為の意味を知っていると通常考えている。

しかし本当にそうであろうか。確かに多くの場合、我々はある一定の意図をもって行動するが、その意図がそのまま我々の行動の意味とされうるのであるか。ここで予め注意しておかなければならないことは、以下の論述では行動と行為とを区別して考えないことである。一般的な言い方をすれば、外的側面に着目するとき行動という言葉が使われ、内的側面に着目するとき行為という言葉が使われる。しかし、今問題になっているのは、その内と外という区別が果して有効かどうかという点なのである。したがって、ここでは一応その内と外という区別を括弧に入れておき、行為という言葉を使うことにする。

他者にとって我々の行為がもつ意味も、ある行為の意味を形成している重要な部分であると思われるが、それは後で触れることにして、その行為の意味が私によってのみ左右されると思われる場合をまず考えてみよう。水を飲むという行為の意味は、私の渴きを癒すということになるのであるか。意図としてはそう言いうるかもしれない。だがその行為の意味が渴きを癒すことであるとは言えない。ここには意図と意味の微妙なずれが存在しているように思われる。つまり、行為の意図より行為の意味の方が広い空間において成立しているのである。比喩的に言うならば、

行為の意図というときそれは行為者の内側に留まりうるが、行為の意味はむしろ逆にその内側に行為者を含むことになる。

別の観点を導入するならば、行為の意味は行為者の生の全体との関係から見られているということである。したがって、渴きを癒すために為された「水を飲む」という行為も、それが盲腸の手術後すぐということであれば、普段の場合と全く異なった意味をもつことになるのである。このように行為の意味が生全体の内に照らして明らかとなると、それは決して私によってのみ左右されるものではなく、むしろ行為者たる私が生の中に置かれているコンテキストが重要なものとなってくる。そしてここで問題になっているのは、コンテキストの中ではある一つの行為を全体から切り離してその意味を問うことができないという点なのである。これを行為の意味の非独立性と呼ぶことができようが、さらに困難な問題がそれに関連して現れてくる。

第一に、行為の意味が生全体の連関において決まってくるとしても、その生の全体は行為者には決して手にすることも知ることのできないものである。したがって、ある行為の意味は生の全体を志向しつつも、それを獲得することが不可能であることによって、常に変動する不確定

なものであり続けることになる。そこで仕方なく我々は、生の全体に替えてコンテキストを行為の意味を決める基準としようとするが、コンテキストそのものがまた変動してしまうのである。

このコンテキストの変動性と関って第二の問題がある。それは確固不動と見える行為者の意図でさえも実はそうではないという、行為のプロセスとしての性格による行為の意味の不安定さである。我々は行為の意味を安定したものとしようとして、往々にして行為の意味と意図との違いに眼を瞑り、行為の意図を意図へと還元する。しかし、意図それ自体が変動してしまうのであるから、これは無駄な試みと言わねばならない。たとえば、論文を書くという行為を考えてみよう。論文を書く際、我々はある一定の命題を論理的に展開し、主張しようと思図する。しかし実際は、書いている途中その当初の意図は不断に変更や修正を余儀なくさせられ、時には全く否定されることさえある。というのは、書こうとしている事柄それ自体の論理によって、我々の考えていることの不十分さや誤りが知らされることになるからである。プロセスの中で行為は変形していくのである。そして、この行為のプロセスとしての性格から、行為者と行為の対象との関係、それらを包むコンテキスト、

さらにプロセスとしての行為に立ち会う者としての他者といったものの重要性が明らかとなる。

行為者と行為の対象との関係については三章で言及するとして、ここでは他者にとって我々の行為がもつ意味をコンテクストに絡めて扱うことにしよう。本節の始めて、行為をめぐる内と外との区別を批判したが、それはその区別によってある行為の意味に対する他者の関与が無視されてしまうからである。私の行為の意味が私の意図にも、私の意味付けにも還元されえないのは、次のような事情による。つまり、たとえそれが私の行為であっても、行為は行為として為されることによって、行為者の置かれているコンテクストの変化を不可避的に引き起こし、さらにその行為に立ち会っている他者にも影響を与えるからである。端的に言うなら、私の行為は我々の行為でもある。

行為の意味は行為者の生の全体を必要とするが、実は行為者の生は他者を不断に巻き込んでいるがゆえに、他者を欠いた生の全体などそもそも不可能なのである。これは他者の生の全体についても当て嵌まり、私も他者の生へと不断に巻き込まれている。したがって、我々は相互に行為の影響を受け、与え合い、ある行為の意味は私と他者とが置かれたコンテクストの内の変動し続けることになる。とす

ると、行為の意味ということ自体無意味なものなのであるうか。そうではないと思う。確かに我々はある行為の意味を完全に知ることはできないが、その行為の意味の深さは知ることができているからである。そしてその意味深さを我々に気づかせてくれるのが他者であり、我々の生の全体を確認してくれるのも他者である。

三 自分に見えないもの

(1) 他者というモメント

「自分に見えないもの」も他人には見ることができ。私の背中には私には見えなくとも他人には見える。すでに述べたように、この見えないものを見ようとすると、我々は他者の視点を必要とする。経験の地平の場合にも事情は全く同一である。我々にとって、我々の経験が地平をもつことが明らかになるのは、我々が他者の経験に、すなわち他者の経験の地平に出会うときである。他人の書いた論文を読むときのことを考えてみよう（たとえばそれは講読の時間であってもよいだろう）。まず我々はその論文に何が書かれているかを理解しようとする。そのとき我々はどういう仕方で理解なるものを形成していくのであろうか。普通我々は出来る限り書き手の立場になって、書き手の論理

に従って読解しようとする。しかし、その結果むしろ我々は我々の立場と書き手の立場というものの違いに気づくはずである。つまり、我々はどんなに努力しても他者の考えを、そして他者を完全に理解することはできず、どこかに理解できないもの、分らないものが残ってしまうのである。

この原因は、第一に我々が十分に書き手の論理を捉えていないことに求められるであろう。しかし、たとえ書き手の論理を十分に認識できたとしても、その論理を認めることができない場合こそが重要なのである。というのは、書き手の論理が一定の明瞭さをもつものであるならば、その論理を十分に捉えられないのは我々の努力が足りないだけであって、我々自身の論理それ自体が問題になってはこないからである。書き手の論理はそれとして認識できても我々にはどうしても認められないというとき、実はそこで問題になっているのは他者たる書き手の論理と我々の論理との差異なのである。理解できないものの出現によって我々と他者との差異は明らかになる。それぞれの論理を支えている経験の地平の違い、それを知ることによって我々は自らの経験の地平に気づき、それまで自分にとって唯一のものであった経験の地平を相対的に眺めることができるよう

になる。つまり、他者が媒介となって我々自身が、すなわち我々の経験の地平が明らかとなるのである。

これは対話においても同様である。我々が対話においてなんらかの主張をする場合、その主張によって我々自らの立場をよしとするということが語り出されている。「あるものは善い」という発言は、倫理学における情動主義が考えるように、あるものについての単なる主観的情動的態度を表すものではない。つまり、そこでは「あるものは善い」と見做すその立場が、換言すればあるものが善いものとして現れてくる経験の地平が、普遍的に妥当するものとして前面に押し出されているのである。我々の「主張」という働きをこのように捉えるならば、我々の立場がそれとして明らかとなるのは、我々と他者との対話の中で、他者が主張という形で提示した他者の立場と我々の立場との違いが次第に明確になって行くことによるのである。

このとき注意しなければならないのは、他者の立場の明確化と自らの立場の明確化とが一对のものとして進行するという点である。この過程を要約するならば、最初に他者の立場が我々にとって理解できないものとして現れ、そのことを通して次に他者の立場と我々の立場との違いということを通じて我々自身の立場が確認され、そして最後に

対立する二つの立場をそれぞれに位置付けることが可能な新しい立場を求める歩みが始まるといふことになる。

したがってこの過程には、自らの立場の相対化あるいは不十分さの確認ということが不可欠である。そういう意味で、我々にとってこの過程は決して好ましいものではないし、むしろ苦しいものでさえあるだろう。しかし、この過程を避けては、自らを能う限り客観的に捉えること、すなわち我々自身の立場の明確化は決して実現されえないのである。

他者という我々にとって他なるものを考慮に入れずに自己認識を深めることができたならそれが一番手っ取り早いだろう。しかし、そのような自己認識なるものは単なる思い込みにすぎない。他なるものに出交わし、それと自己を突き合わせることを強制されることによつてしか我々は自己認識をもちえないのである。この苦しい自己確認を強いられるということに耐える、すなわち自己の立場の明確化の過程の内に留まり続けるということ、これこそが我々にとつて要求されているものなのである。だがこの要求は誰から、あるいは何処から発せられているのであろうか。

具体的に我々にその要求を突き付けてくるのは他者である。このとき、その要求が要求として提出されているのではなく、たとえば他者の見解によつて我々の考えに含まれる

問題性が明らかにされるといふ形であってもよい。他者によつて示されたある問題を我々がどのように受け止めるか、そこが鍵となる。他者からの問を問として捉え、そこに含まれる要求に誠実に応える、そうすることで我々は、これまで自らの気づかなかつた、自分に見えていなかった在り方を発見しうるのである。つまり「自分に見えないもの」は「他人によつて見えるもの」となると言うことができよう。さらに言うなら、いわば「自分に見えないもの」に關しては他者がイニシアティブを握っているのである。しかし、どうして他者は我々に対して常に問を投げ掛ける者として現れるのだろうか。さらに、投げ掛けられた問を問として受け止め、それに応えることを何故我々はしなければならぬのだろうか。このことを我々の経験の構造に絡めて考えてみよう。

(2) 経験の開放性

経験が地平をもつことから、経験それ自体は完全なものでも完結したものでもなく、そこから得られた我々の知も絶対的なものではなく相対的なものでしかない、第二章で述べておいた。しかし、この経験の地平性ということを決して我々の消極的否定的側面のみ表すものではない。むしろ人間にとつてこのことは本質的な意味合いをもつて

いると考えねばならない。というのは、経験が地平をもつとは、経験が常に開かれているということを意味するからである。つまり、地平が地平として働けり経験は常に未完のものであり続け、次々と見知らぬものが経験の内へと現れてくるのであり、このことがまさに我々に考えるといふことを強いてくるからである。したがって、考えるといふことが人間の本質的な在り方には無縁のものであると主張するのでない限り、経験の地平性は我々の積極的肯定的側面をも表していると言えよう。

さらに、我々は経験を世界に出会い世界を再統合して行くものとして理解したことを考え合わせるなら、経験が開かれているということによって我々には新しい課題が託されたことになる。すなわち、我々は次々と現れる未知の異他的なものを内に取り込んだ形で新たに世界を統合し直して行かねばならないからである。このことを前節と関係させて言えば、未知なるものの出現とそれに対する我々の再統合を、広い意味で経験における問と答の運動と呼ぶことができよう。つまり、他者が我々にとって問を投げ掛ける者として現れ、その間に我々が答えざるをえないのは、我々の経験が開かれているからである。この経験の開放性を我々が認める限り、言い換えれば我々の有限性を認める限

り、他者は我々にとって問を示し、その答を要求する者であり続けるのである。したがって、自らの有限性を痛切に知れば知るほど、また自己の負わされた課題の容易ならざること気がかされるのである。

こうして、この問と答の運動は我々の責任という形をとることになる。責任ということについてはここではこれ以上立ち入らないが、問と答の運動の相互性という点にだけ触れておくことにしよう。未知のものに出会って我々が世界を統合し直して行くとは、換言すれば、世界をもう一度意味付けし直すということである。また、他者が異他的なものとして我々に立ち現れるとは、逆から言うとも、他者にとって我々が未知なるものとして立ち現れることでもある。したがって、そこでは世界の再統合が、意味付けのし直しが相互に生じていると考えられる。我々の側から言えば、他者は我々を意味付け規定して行くものとして現れる。その他者を我々が我々自身の世界へと統合し意味付けし直すとは、他者からの意味付けを我々の側から意味付け返すということでもある。つまりここにおいて、問は答であり、答は問である。すなわち、ここでの責任とは一方的なものではなく、相互的なものとしてしかありえない。結局、自己の在り方の有限性から生じる我々の自己責任、そしてそ

の自己責任の上に成立する他者とのあいだでの責任、これら二つの責任は我々の経験の地平性・開放性に由来するものであり、一対のものとしてあるのである。

こうして我々は経験において、我々ならぬものに常に曝され、それらからの侵入を受け、そしてそのことによって我々は「自分に見えないもの」を見ることができるようになるのである。つまり、我々は生きて行くその過程で初めて後知恵的に「自分なるもの」を確認しようとしか言えないようである。そうであるとするならば、「自分に見えないもの」に関して我々はイニシアティヴを他者に握られて

いるとしたのは不十分であったことが分かる。というのは、他者によってイニシアティヴを握られると同時に、我々は他者の他者自身に見えないものに関してのイニシアティヴを握っていると言いうるからである。我々の経験とは、その内において自己と他者とが相互に明らかになる場なのである。ここで逆説的に言うなら、「自分に見えないもの」それこそが経験を生きている我々の自己そのものの在り方なのである。

(本学助教 倫理学)